

生業活動と「かかわりの自然空間」 曖昧で不安定な河川空間をめぐる

Subsistence and "Nature Space of the Relations"

関 礼子

- ①「かかわりの自然空間」
- ②安田町小松地域の生業と阿賀野川
- ③「集落の川」での漁撈形態
- ④生業複合からみた河川空間と「かかわり」の重層性
- ⑤河川空間の過剰分化と「かかわり」の再構築

【論文要旨】

本稿では、人々と自然との多様な「かかわり」が交錯する場を「かかわりの自然空間」と呼び、新潟県阿賀野川流域集落の生業複合を通して人々の行為と河川空間が持つ「かかわり」とその変化について考察する。

阿賀野川はしばしば氾濫し、流路を変えた。阿賀野川は土地を削って新しい流路とし、これまでの流路を新たな土地にする「暴れ川」だった。だが、流域の人々はその曖昧で不安定な空間がもたらす恵みを最大限に利用する生活戦略をとってきた。

本稿では、このような流域集落の生業のあり方に着目し、第一に、生業複合が持つ「在地リスク管理」の特徴、多様な生業の展開を可能にしている河川空間の「かかわり」の重層性について明らかにする。第二に、「かかわり」の重層性が、阿賀野川の曖昧で不安定な性格と相関することを、流域集落の生活文化の多様性、所有感覚の混乱、空間の変化による安定的知識の無効化という3点から論じる。そのうえで、生業や生活文化の変化が、川との「かかわり」を変質させたことを指摘する。

①……………「かかわりの自然空間」

——人間化された自然と身体に埋め込まれた自然——

人はしばしば、網膜に映し出された画像以上のものを自然のなかに読み取る。自然との「かかわり」が深くなると自然の風景はより精緻な情報を持ち、はじめて訪れた土地もまた自らに馴染み深い「かかわり」との比較対照で豊かに意味づけられた自然の風景となる〔沢田 1975, 1997〕。

風景のなかに現出するこのような意味世界は、ユクスキュルとクリサートが、「環境世界 (Umwelt)」と呼んだ動物の認知世界に似ている〔ユクスキュル・クリサート 1973〕。彼らによると、生物は種ごとに異なる世界を生きており、ダニはダニの、ハエはハエの「環境世界」を持っている。同じように、人間と自然との「かかわり」が創り出す認知世界は、人間とその持つ文化の多様性によって、多様な「環境世界」を構成している。

このような観点からすると、〈人間—自然〉の二元論はフィクションにすぎない。モスコヴィッツは、ある自然を観察するとそこに社会が見えてくるという事実にもかかわらず、人間と自然とが分離し、対置されるという仮定が維持される理由のひとつには、自然に対する支配の論理があると指摘している〔Moscovici 1974=1983:248-249=250-251〕。日本で、現在用いられている意味での「自然」という言葉・概念が移入され、浸透してゆくのは、明治以降の近代化の過程である。それは、自然を支配するという発想——たとえば、近代治水思想は「洪水をあふれさせない」ことを出発点にし〔大熊 1988:24〕、近代農業は収穫物の量や時期を人間の意に沿う形で調整可能なものとした——が、具現される過程と同時並行だった。

だが、具体的な空間と時間のなかを生きる人々にとって、その取り巻く自然は必ずしも支配の対象ではない。自らの「環境世界」として組織化された自然は、自らの「かかわり」の様態を示す表現型として、ひとつの風土を形成するものとなる⁽¹⁾。このことは、「かかわり」のあり方が画一的であるところにひとつの風土が存在するということではなく、むしろ、多様な「かかわり」が交錯したところに風土が生まれてゆくということを意味する。このように「かかわり」が交錯する空間を「かかわりの自然空間」⁽²⁾ (Nature Space of the relations) と呼ぼう。

「かかわりの自然空間」は合わせ鏡のように自然の中に人間を、人間のなかに自然を映し出す。自然は人間に外在しつつ人間の営為や思惟を表出させる「人間化された自然」であるし、人間もまた自分自身のなかに「身体に埋め込まれた自然」として自然の態度を有している。

生業をはじめとする人々の行為と「かかわり」を持つ自然は、人々に外在しつつも自然のなかに文化型を表出させるという意味で、きわめて人間的な性質を有する「人間化された自然」の領域である。たとえば、安室知は「人が一度手を入れ改変した自然のなかに創り出した（またはおのずと現出した）ところの二次的自然」には、「豊富な民俗知識と民俗技術が盛り込まれている」と述べ〔安室 2000:135〕、農山漁村を取り巻く自然が、生業を通じた継続的な「かかわり」の結果、生態系を安定させ、あるいは多様な生物の生息を可能にしてきたと指摘する。また、一見すると人の手の入っていないようにみえる自然が「^{サンクチュアリ}聖域」として囲い込まれたときに、その自然と深い「かかわり」を持ってきた人々が排除されることがあるが〔Simonnet 1991:120, グレン 1996:154, 鬼

頭 1996: 174-175], それも自然のなかに人々の営みの相貌が潜んでいるために惹起した問題といふことができるだろう。

「人間化された自然」の内面的なあらわれが、「身体に埋め込まれた自然」である。伝統的な生業を営む人々は、五感を通して自然の態度や周期性を体得し、自然に関する知識を蓄積してきた。こうした過程は、働きかけると同時に働きかけられる事物に「習う」とか「教わる」と表現されることがある[田口 1992: 196-197]。伝統的な生業世界では、身体を道具として用いると同時に身体の延長として道具を用い⁽³⁾[篠原 1998: 1], 主たる生業か副次的な生業かを問わず、あるいは遊びの要素が強いマイナー・サブシステム⁽⁴⁾においては特に、自然は技能、コツ、経験という形で人々の行為に内在してきた。このような「身体に埋め込まれた自然」は、ローカルな知識によって組織化された行為の体系を独自の認識地図に描くことができる⁽⁵⁾。それは時に、その土地を離れた人にとつての故郷や、パトリオティズム (patriotism) の原風景となる。

このように、「かかわりの自然空間」のなかでは人々と自然とを境界づけるのが困難である。「人間化された自然」と「身体に埋め込まれた自然」は、「かかわり」が存在してはじめて出現する領域だからである。だが、今日では、両者の間に距離を感じる場合のほうが多いのも事実だろう。変化の第一の要因は、物理的モメントによる強制的または半強制的な「かかわり」の分断=破壊で、具体的には汚染や画一的な開発の影響が挙げられる。第二の要因は、生業構造や生活様式の変化に伴う「かかわり」の希薄化が、自然との疎遠という状況を生み出したことである。分断と疎遠という側面は、汚染・開発されるから疎遠になる、疎遠になるから汚染・開発される、という連関のなかで自然・環境問題を惹起する。そのため、疎遠になった自然と再び「かかわり」を結びなおそうという発想が、環境教育や都市計画、まちづくりなどのコンセプトになってきている。「かかわりの自然空間」をいわば理想型とし、「かかわり」を取り戻す試みが始まっているのである。

本稿では、新潟県北蒲原郡安田町小松という阿賀野川流域地域の生業空間とその変化に着目しながら、「かかわりの自然空間」について検討する。小松では、電源開発などによるダム建設、新潟水俣病の発生や生活排水による水質の汚染が「かかわり」を分断する物理的なモメントとなって、直接的・間接的に川と結びついた生業構造を変化させてきた。さらに、モータリゼーションの進行に相俟って、人々の生活意識は川から徐々に離れてきた。「川に用事がなくなった」ことが、「川離れ」を急速に進めることになったのである。

小松や阿賀野川流域に限らず、河川との「かかわり」の疎遠という状況は、多かれ少なかれ、全国各地の河川流域で進行してきた。このような状況に対し、河川空間を親水性のある公園やオープンスペースとして組織化する、複数の自治体による広域観光圏創出のための結節点として川を捉える、遊覧船やカヌー、ボートを利用した遊びやスポーツを体験しうる場として供するという動きが見られるようになった。人々を再び川へと結びつけ、「かかわり」を再構築しようという試みである[リバーフロント整備センター 2001]。本稿では、生業活動の濃淡が生み出してきた重層的な「かかわり」について考察することで、新たな「かかわり」を誘引する装置(仕掛け)を考える一助としたい。

②……………安田町小松地域の生業と阿賀野川

——生業複合からみた空間の一体性——

尾瀬を水源として伊南川と合流する只見川は、猪苗代湖を水源として大川と合流する日橋川と出会い、新潟県に入ると阿賀野川と名を変えて日本海へと流れ出る。全長約210キロメートル、流域面積約7340平方キロメートルの大河である。このうち、阿賀野川は92.7キロメートルである。

山間部の険しい谷間を縫って阿賀野川が流れる上流域は、かつて「山蒲原」と呼ばれた東蒲原郡で、交通の中心は津川町であった。新潟から会津への物資運搬の玄関口として、会津から新潟へ下る物資輸送の中継地点として、川湊を中心に栄えた地である。船運から川を区分する呼称は、津川を基点として上流が狭隘で瀬の多い「揚川通船」、下流が物資輸送の大動脈となる「津川船道」であった。1880（明治13）年の「東蒲原郡内登り下り諸荷物記事」（徳永次一氏所蔵）によると、物資運搬状況は上り荷が米・大豆反物、砂糖、塩、身欠鯨などの海産物、下り荷が銅や伐木、炭、薪が中心で、旅客数も登りが4万人、下りが3万人となっている（表1）。なお、船運とは別に、筏流から川を区分するときには、津川より上流が「上川筏」、下流が「下川筏」という呼称が用いられてきた。

阿賀野川が谷口を抜けて蒲原平野へと流れ出るところに、山を伝って「ダシの風」と呼ばれる強い風が吹き降ろす安田町がある。安田町の阿賀野川沿いには小松、草水、六野瀬、渡場、新保、南郷、砂山、小浮、千唐仁があり、安田町と隣の水原町との境に稗ヶ川原場（稗河原場）がある（図1）。同じ町の同じ阿賀野川沿いの集落とはいえ、これらの地域はそれぞれに独自の歴史や文化、アイデンティティを持っており、生業複合のあり様や阿賀野川への依存度もそれぞれに異なっていた（表2）。

なかでも特徴的なのが最上流に位置する小松地域である。安田町の各集落はかつて「阿雅北」と呼ばれる北蒲原郡に属しており、1889（明治22）年の町村制施行以後、幾度も町村合併を繰り返してきた。現在の行政区画が形成されるのは1956（昭和31）年であり、このときに編入されたのが小松（現在約90戸）である（表3）。

小松は安田町に編入されるまでは東蒲原郡であり、古くは会津領に属していた。近隣の石間村（現在三川村）、佐取村（現在五泉市）と合併して小石取村小松となった1875（明治8）年の「第三大区九小區小松村」という地図によると、この時期の戸数は52戸である（番外を除く）。また、小松の共有林は55名の記名があるので、1889（明治22）年の町村制施行前後の時期の戸数は55戸であったと推測されている。

集落のモノ、ヒトは隣の石間、対岸の佐取との結びつきが強く、すぐ裏手に山野が迫る小松の交通形態は、阿賀野川沿いに伸びる会津街道と、阿賀野川という物資輸送の大動脈を表玄関にしていた。1908（明治41）年に馬下橋が架橋されたが1913（大正2）年の阿賀野川大洪水で流出したため、対岸への交通には主にサンパ舟といわれる小舟が用いられた。1914（大正3）年に岩越線（磐越西線）が開通して馬下駅が置かれるのに併せて、馬下と小松を結ぶ新潟県営の渡船場ができた。

農地が狭く、交通の発達した安田町の川沿い集落では、自給的な生業と現金収入とを組み合わせ

表1 津川船道運賃表

荷 物	登り運賃	区 間	下り運賃	区 間	数 量
塩1俵	18銭5厘	新潟—津川			14メ目造りにつき
米大豆	50銭	新潟—津川			1石につき
諸荷物	58銭	新潟—津川	45銭	津川—新潟	1駄につき
穀 物			18銭	津川—新潟	1石につき
炭			5銭5厘位	津川—新潟	1俵につき
薪			35銭位	津川—新潟	1棚につき
旅 人			32銭	津川—小松を越えて新潟まで	1人につき
旅 人			14銭	津川—小松・馬下まで	1人につき

注 1年度の登り通客4万人余り。下り通客3万人余り。

出典 「東蒲原郡内登り下り諸荷物記事(明治拾三歳辰三月三十日調文)」より作成。

表2 集落の阿賀野川への依存(昭和初期～戦後)

	小 松	南 郷	千 唐 仁	稗ヶ川原場
焚 き 物	共有林などの利用	阿賀野川	阿賀野川	阿賀野川
渡 船 場	県営渡船場	なし	なし	県営渡船場
河 川 敷	なし(私有地)	川岸に畑	シマ(中洲)の畑	シマ(中洲)の畑
サンパ舟の所有	相対的に少ない	相対的に多い	ほとんどの家が所有	ほとんどの家が所有
大 船 の 船 頭	いない	相対的に少ない	多くが大船に乗る	いない
特徴的な川の仕事	粗朶などの運搬	筏仕事があった	玉石・砂利採取と運搬	集落地先で砂利採取

表3 小松の沿革

年	事 項
1868(慶応4)	戊辰戦争(会津戦争)で小松村は60軒余のうち5軒を残し焼失
1868(明治元)	会津軍が降伏、会津領は新政府領になる
1869(明治2)	若松県の新設、小松など東蒲原郡は若松県入る
1875(明治8)	小松村、石間村、佐取村が合併して小石取村になる
1876(明治9)	若松県が福島県に統合され、東蒲原郡は福島県に入る
1886(明治19)	福島県東蒲原郡が新潟県に編入される
1889(明治22)	小石取村、五十島村、上戸谷渡村が合併して下条村になる(下条村大字小石取小松区)
1955(昭和30)	下条村、三川村、揚川村大字谷花が合併して三川村になる(三川村大字小石取小松区)
1956(昭和31)	三川村より分村して安田村に編入される(安田村大字小松)

出典 安田町史編さん委員会編[1997a:98]より抜粋、作成。



図1 阿賀野川流域集落（安田町）



写真1 小松集落と阿賀野川（1957年8月撮影，石井欣治氏蔵）
写真手前が小松。

た生業が営まれていることが多い。小松も例に漏れず、それぞれが複合的な生業を展開する生活戦略をとりながら、集落が全体として山と川を包摂した生業空間を形成してきた。そのような状況を、戦後の二世帯の生業複合状況を中心に確認してゆくことにしよう（写真1）。

1 渡船夫と生業空間

かつては現金収入を得る手段が不安定で、生涯の職業が複数の業種にわたることは珍しくなかった。以下に見るM氏も石材店、渡船場、瓦屋などさまざまな仕事を経験してきたが、ここでは渡船夫時代を中心にした生業形態をみてゆくことにする。

1947（昭和22）年から1956（昭和31）年まで渡船夫だった父親を継いで、1955（昭和30）年から1962（昭和37）年まで渡船夫を勤めたM氏は阿賀野川を「オオカワ」と呼ぶ。M氏によると、当時の阿賀野川は現在とはまったく異なる相貌を見せていた。石河原が広がり、流れが速いオオカワの渡船夫の詰め所は対岸の馬下にあり、小松には渡船利用者の待合所があった。

馬下と小松の間を汽車やバスの時間に合わせて1日約15往復する渡船は県営のため無料であり、渡船夫は県職員に準じた立場であった。利用者は主に小松や近隣集落の人で、主に五泉方面の市などに向かう客だった。勤務は日の出から日没までで、日の長い時期は朝6時半には、利用者が舟を待っていることもある。そのため、家から「舟場道（または渡し場道、渡船場道）」を通して徒歩30分の渡船場に向かうのは「朝飯前」であった。朝飯と昼飯は妻が利用客に言付けてM氏へ届けられた。水の少ない時期には、清水が湧き出る場所やオオカワの真ん中で水を汲み、お茶を沸かして弁当を食べた⁽⁷⁾。

渡船に用いられていたのはサンパ舟という小型の舟をひと回り大きくした舟であったが、風の無い日には「動くなよ」と声をかけて、定員15名の2倍もの利用客を乗せて運ぶこともあった。時には荷車も乗った。だが、渡船夫の仕事は天気が悪ければ重労働である。波風がたつ阿賀野川を横切るのは技術的に難しいだけでなく、舟が下流へと流されるため、川岸を伝って舟を引っ張りあげなくてはならない。波風がいつそう強くなり、舟を出せないときには赤旗が立った。

さて、当時、3世代同居であったM氏世帯での現金収入源は、渡船夫の賃金の他、M氏の母が行っていた養蚕であった。安田町の河川流域のなかでも小松は養蚕が盛んで、阿賀野川沿いの畑地や対岸の向島は桑畑になっていた。向島の桑畑は青年団が開墾したもので、自家用のサンパ舟や渡船を利用して対岸に桑の葉を摘む人の姿もあった⁽⁸⁾。道具を洗ったり、病気にかかった蚕を流すのは阿賀野川であり、養蚕もまた阿賀野川の生業空間に組み込まれていた。

他方で、M氏の父は主に田圃仕事、妻は畑仕事の役割を担っていた。1942（昭和16）年頃の阿賀野川沿いの土地の開田事業では、桑を引き抜いて田圃を造成したが、当初は用水が全ての田圃を潤すことができず、砂地に適したサツマイモ、人参、ごぼうなどを作付けしていた。M氏の田圃に水が届いたのは1955（昭和30）年頃であったが、水が浸透する土壌のうえ、時間水であったため、土壌改良のために粘土や堆肥を入れ、夜の水管理のために水路脇に小屋を建てて作業を行った⁽⁹⁾。

2 山仕事・川仕事と生業空間

農業（田畑、養蚕）と山仕事を組み合わせる生業形態もみられた。養蚕の合間の暇をみて、木材

商や粗朶、柴などを扱う山師に雇われて現金収入を得るのである。

G氏は6人兄弟の末で、兄が皆、国鉄勤めで家を離れたため、小松の家に残って田畑や養蚕の仕事を手伝った。1945（昭和20）年に尋常高等小学校を卒業してから昭和30年代にかけて、農閑期には「山仕事」で現金収入を得ていた。その当時、「粗朶担ぎ」は1把につき5円であった。1回に10把担いで、午前2回、午後2回運ぶと、1日の手間賃は200円になる⁽¹⁰⁾。多額の現金収入を得ることが可能な山仕事で稼いだのは、体力のある「若い衆」が多く、日の出となるとすぐに草鞋履きに、荷縄やゴウギ（荷を背負うときに用いる藁でつくった道具）、弁当持参で山に出向いた。

粗朶は阿賀野川の川岸に下ろされ、船に積まれて下流へと運ばれた。粗朶は河川の護岸工事に用いられており、「暴れ川」だった阿賀野川が水害をもたらしたり、定期的な川の氾濫が護岸を削ったりするために一定の需要があったのである。なお、この護岸工事に携わる仕事は「川仕事」と呼ばれ、舟が上手な小松の若い衆も働きに行っていた。

冬場になると、若い衆が集まって藁仕事が始まる。山で用いる荷縄、草履、ゴウギはもとより、深靴、蓑などが作られた。また、飯前仕事は、前日に巣穴に仕掛けた罠に山兎がかかっているか否かを確かめ、捕獲することであった。これは山でのマイナー・サブシステンス活動の一形態である。

G氏が山仕事を離れ、庭師などの仕事に現金収入源を求めるようになった時期は、阿賀野川の護岸工事が舟と粗朶や木材など山の材を用いた工法から、コンクリートなどを用いた工法に変化してゆく時期と前後していた。小松で山仕事なくなる時期は、小松の川仕事なくなる時期でもあったといえる。

このように、戦前、戦後の小松では、山と川の両方に依存する形態で生業の複合がみられた。複合的な生業の展開は、世帯として、あるいは集落として展開されることで、重層的な自然との「かわり」を形成し、山と平地、そして川という空間を一体的なものとしていた。こうした生業の展開は、「自然の全体的な結びつきを丸ごと利用する術」[内山 1994：138]の一形態とみることができる。

③……………「集落の川」での漁撈形態——鮭漁を中心に——

阿賀野川を生業空間に組み込んでいた集落で、人々の足が川へと向かい、漁撈が生業の一部を構成するのも当然のことである。だが、戦後の新漁業法のもとでの漁業組合の設立と漁業権の設定によって、漁撈のあり方や方法、意味には変化がみられた。

新漁業法以前の阿賀野川は「半瀬半川」が集落の持分とされていた。専用漁業免許は「字小松」に対し与えられていたのである。対岸集落と川の流れの中心になる瀬で分けて、それぞれの地先を利用、管理するという方法で、この境界線は現在の集落の境界と重なっていた。「半瀬半川」の時期の小松の漁撈は、入札で権利を獲得して行う鮭・鱒漁と、権利を必要としない鮎を含むその他の漁に区分される。鮭、鱒以外の魚種ならば、集落の人々は自由に漁をすることができるのだから、川への関心は必然的に高かった。既述した渡船夫のM氏は仕事の合間に筒を仕掛けて漁を行い、G氏は山仕事を終えてから、あるいは仕事が休みになる雨の日などに漁をした。川魚漁は自給的な生業活動であると同時に、娯楽的要素を持つ生業活動であった。

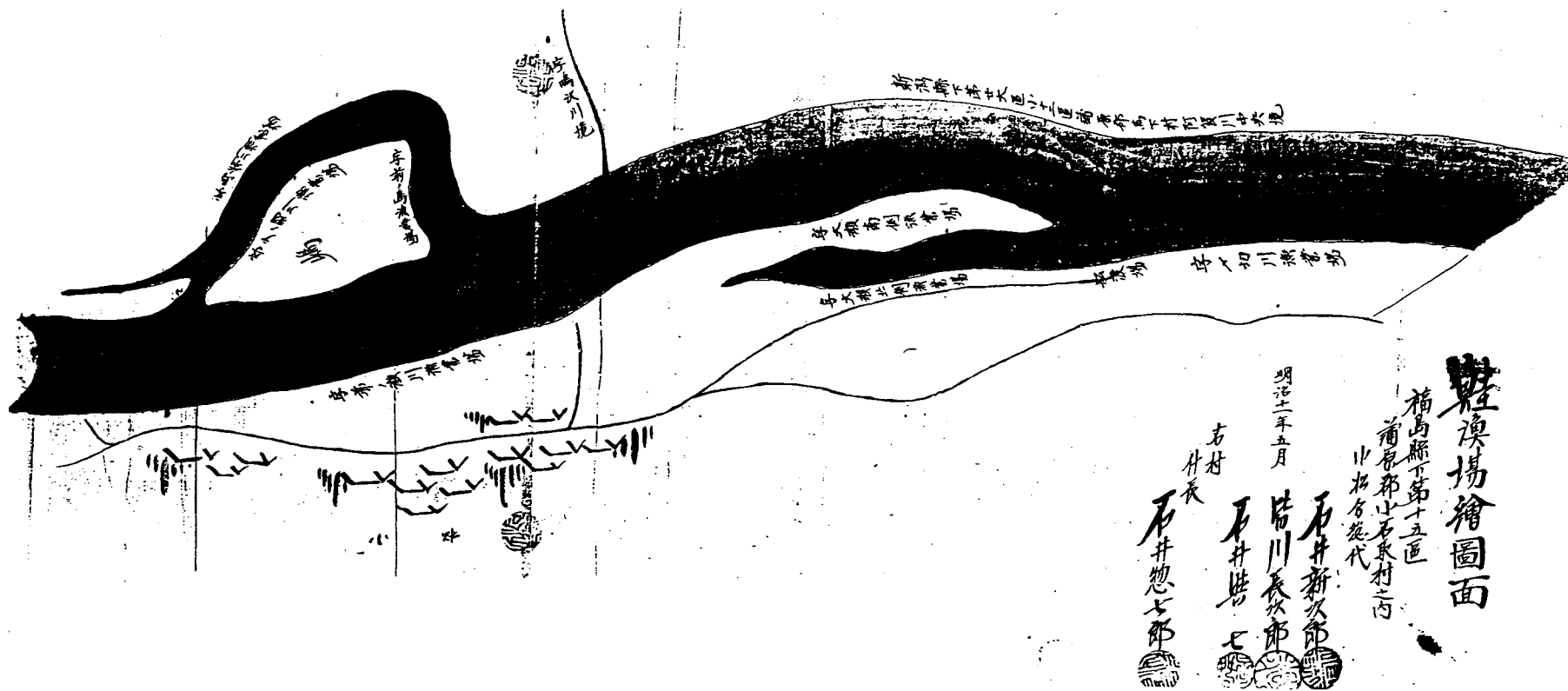


図2 1878年の小松の漁場（小松区資料）

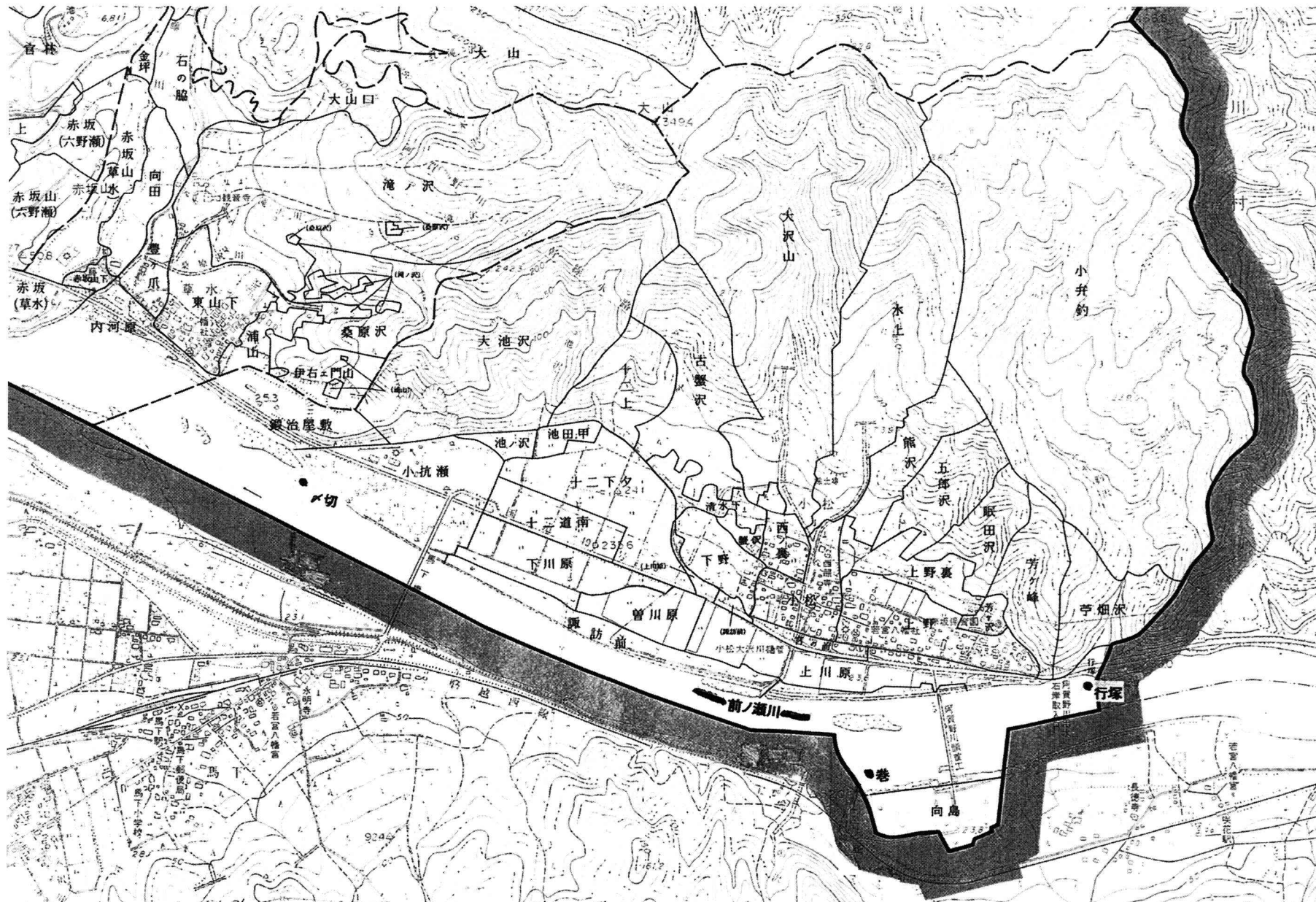


図3 昭和初期の小松の漁場（安田町大字・小字区域図〈略図〉に加筆，作成）

権利を必要とする鮭・鱒漁に対しても、集落では高い関心が持たれていた。入札での落札金額は集落の共有金として積み立てられて集落の事業で用いられ、あるいは集落で配分されたからである。配分金を受け取ることができるのは、小松に住み、ムラ勤め（人足賦役など）を一定年勤めた家であった。分家したばかりの家は配分金は少なかった。入札される漁場は、阿賀野川がしばしば流路を変える不安定な空間であるがゆえに、その時期ごとに異なる。たとえば、1878（明治11）年の小松の漁場を示した図2には、7箇所の漁場が記載されているが、1913（大正2）年の馬下橋が流出する大洪水で流路が大きく変化し、昭和初期の漁場は「前ノ瀬川」「巻」「行塚」「メ切」の4カ所であった（図3）。

ところで、当時の鮭・鱒漁はどのようなものだったのだろうか。1940（昭和15）年の鮭漁を記録した「前ノセ川大福帳」（石井欣治氏所蔵、以下「大福帳」と略記、資料参照）から考察することにした。

1 入札から漁の開始まで

小松では旧正月を終えた2月23日に、いわば「御用始め」にあたる集落の総会が開催されることになっていた。予算や役員選出などを終えて最後に行われるのが鮭川入札である。どのくらいの金額で落札されるかで集落の配分金額がいくらになるか左右されるので、入札は総会の最大のハイライトであり、祭りのような性格を持っていた。一方、落札を狙う人々は、入札金額（運上金）を回収できるか否か、入札参加が見込まれる人の動向はどうなっているかを慎重に見定めて決定した金額で、入札に挑んだ⁽¹¹⁾。

1940年に入札されたのは、良好な漁場の順に挙げると、鉤漁（図4）だけでなく網漁ができる「前ノ瀬川」、遅くまで鉤漁ができる（＝オクガワである）「メ切」、そして鉤漁場である「行塚」の3カ所であった。やはり鉤の漁場である「巻」は「前ノ瀬川」を落札した人に権利が付与された。この年の「前ノ瀬川」は41円78銭で家大工だったI氏が落札した。

鮭の溯上がはじまる頃、小松の「鮭捕り名人」だったTG氏が「鮭がホリついた」と知らせに来た。「ホリつく」とは、産卵のために溯上したメナ（雌）をカナ（雄）が寄せている状況のことである。「遊んでいる鮭は逃げやすい」が「ホリついている鮭は動かない」ので捕りやすい。漁期の到来を告げるのが、「ホリつく」光景なのである。

鮭川の漁の技術を持たないI氏は、実際に漁を行うことができない。そこで、捕れた鮭の代金を二等分に「取り分け」の条件で、実際の漁は魚とり上手のTG氏が行った。

2 鮭漁の推移と技法

鮭漁は鉤漁からはじまり網漁へと移行してゆく。「大福帳」では、鉤漁は11月7日から記載されており、販売もまた同日になっている。だが、鮭の溯上は通常10月頃からはじまり、一番はじめに獲れた鮭の尾や1のヒレ（胸鰭）は、川全体を見通せる場所に立てられるアンジャ小屋の奥に祭られた水神、えびす神（おいべつさま）に祭られることになっているので、11月7日以前に捕れた「ワセユ（早生魚）」は「取り分け」で自家消費されたか遣い物になったものと思われる（写真2・3）。

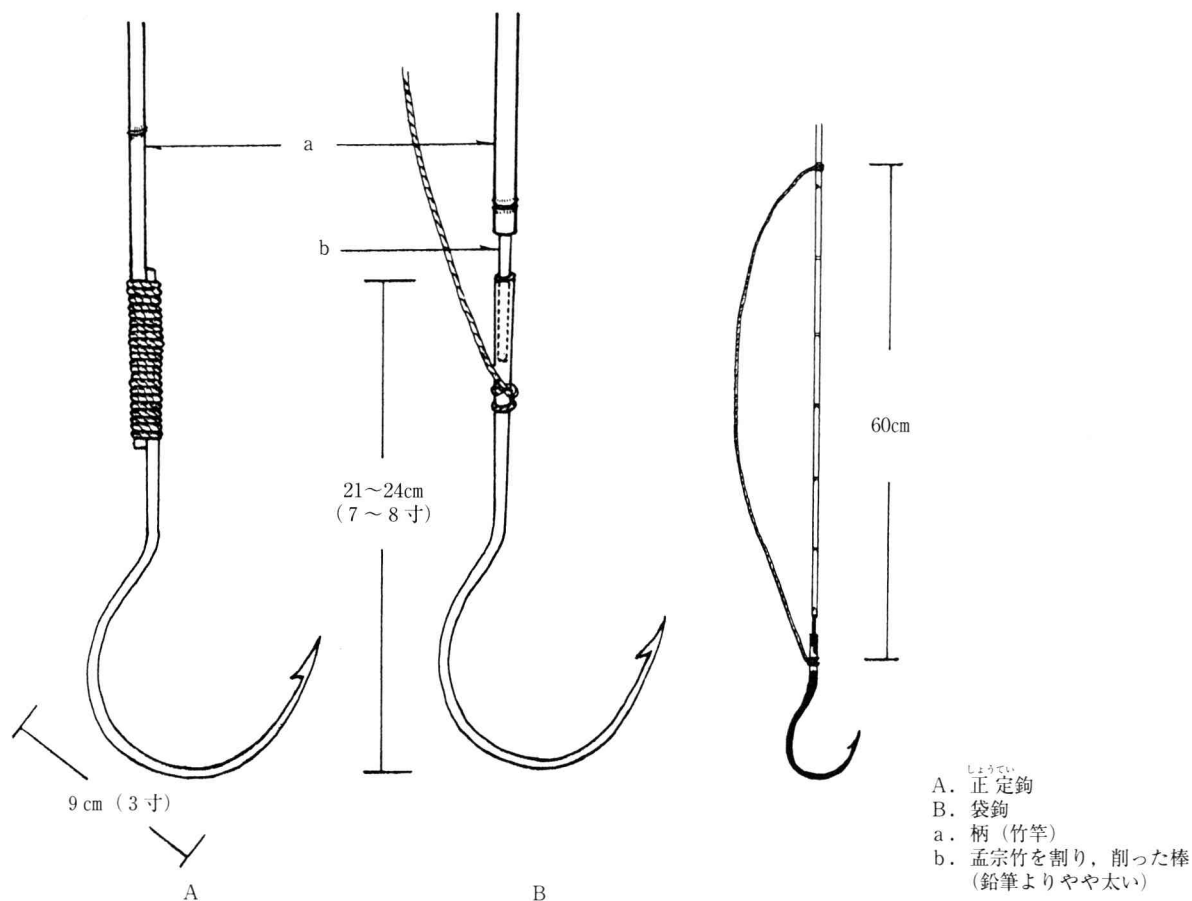


図4 サケ魚用の鉤 (阿賀野川中流域)

出典：松本・本間 [1995:58]

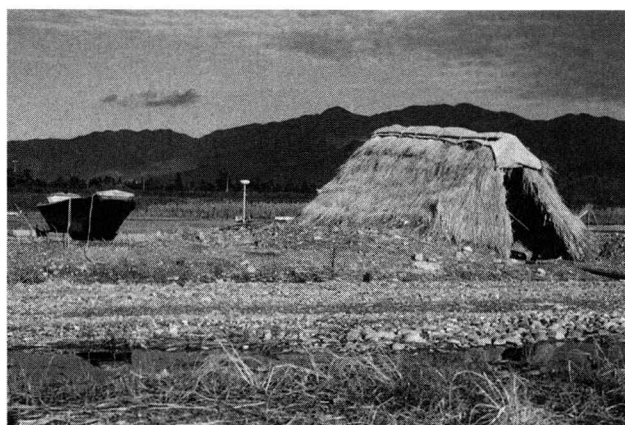


写真2 アンジャ小屋 (旗野秀人氏撮影)

新保の「新風会」が1997年に復元したもの。

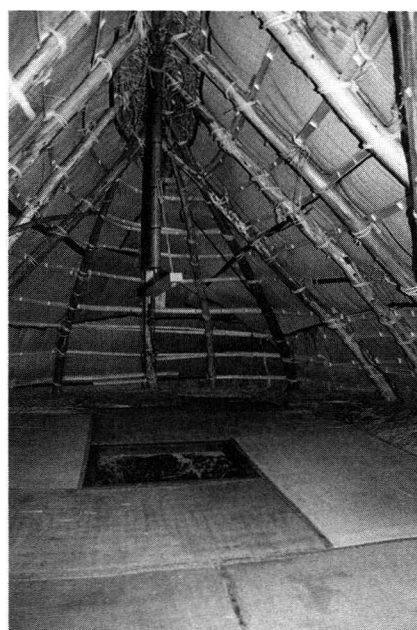


写真3 アンジャ小屋内部 (旗野秀人氏撮影)

1997年に復元された小屋の内部。囲炉裏では鮭汁がつくられた。中央奥に水神様の札がみえる。

鮭が大量に溯上する 11 月 19 日には網が 50 円で調達され、その日のうちに網下ろしが行われた。鉤漁だけの収支決算には「大入叶」と記載され、網漁は 12 月 29 日まで続いた。

網漁は TG 氏の家族を総動員して行われた。地下水の出る川岸に寄って産卵する鮭を一括採捕するのである。6 網分の鮭網を積んだサンパ舟には、舟の親方を務める「トモ」(TG 氏)、「舵とり」と「網巻き」(年長の息子たち)が乗る。舟に乗らない女や子供は川岸で網の端を持って、川の流れに逆らいながらトモの合図を待つ。トモの「よし」という掛け声で岸にいる者は少しずつ下がりはじめ、舟の櫂がとられるスピードに合わせて網巻きが網を巻く。終わりの合図で岸にいる者が川に入って網を引き寄せる。

前ノ瀬川は上流から下流に 3 網引くことができる長さの漁場だった。1 回目は朝の 3 時頃に、2 回目は日の出前に引かれ、3 回目が終わるのは朝の 8 時頃になる。それぞれ 3 網ずつ引かれるので、合計 9 回網が引かれることになる。頻繁に網を入れると産卵場所に鮭が寄り付かないので、翌日の朝までは川を休ませ、川に潜って石を動かしたりしないことが肝心だというのが、TG 氏の考えだった。

3 鮭の販売と収支決算

捕れた鮭は「ナヅチ」という棒で頭を叩いてからアンジャ小屋に入れ、その後に家に持ち帰った。枠をした土間に鮭を運び、重さを量って「付け木」に貫刃を書き入れて鰓に差し込み、帳簿に記載した。鮭は直接に買いに来る人へ販売するほか、行商に出たり、近隣の料理屋からの注文に応えたりした。

鮭の値段は重量だけでなく、鮭の状態によっても変化する。「大福帳」には、「モケ」や「シボリ」などの記載がある。「モケ」はホリを掘って弱った鮭のことで「モケッポ」と呼ぶこともある。たいていはカナ(雄)である。砂利場で白子をかけてかき回すと尾びれが白くなって「モケてくる」状態を意味している。この状況が進んでくると「大モケ」になる。

「シボリ」は採卵のために腹を絞った鮭のことである。当時は、現在のように孵化場が採卵から孵化までを一括して行うのではなく、各漁場で採卵が行われていた。採卵手が来る頃を見計らって、採卵後に白子をかけてかき混ぜておくと、採卵手がこれを購入して孵化場に持ち帰り、孵化させた。採卵手が来なかったら、子供達がこれを食べられると喜んだというエピソードも残っていた。もちろん、「モケ」や「シボリ」は値段が安くなる。

その他に、「ケ(気)」と呼ぶ鮭もあった。海から一気に溯上してきた鮭はタコやイカを未消化の

表 4 前ノ瀬川鮭漁の収支決算 (1940 年)

事 項	本数	収 入	事 項	支 出
魚代・鉤(11月7日～11月19日)	27	53円19銭	運上金	41円78銭
魚代・網(11月19日～12月14日)	297	865円53銭	雑費用	48円15銭
魚代・網(12月14日～12月29日)	48	177円97銭	特に網元雑費に	5円00銭
採卵代		46円85銭	支出合計	94円93銭
収入合計		1143円54銭	差し引き収入	1048円61銭

出典 『昭和十五年十一月吉日 前ノ瀬川大福帳』より作成。資料提供石井欣治氏。

まま腹に入れており、溯上が早いぶん油も抜けておらず、美味であったという。

さて、この年の鮭漁は大漁のうちに終わった。収支決算をみると、採卵代 46 円 85 銭を含めた総収入は 1143 円 54 銭であり、運上金や雑費などの支出を差し引いた実収入は 1048 円 61 銭となった(表 4)。年によって漁獲高に変動があり、場合によっては儲けがほとんどないこともあるが、鮭川に一攫千金を夢見て入札に参加する者が「山師」ならぬ「川師」と称されるのも、豊漁時のこの儲けの大きさからである。家大工で舟を知らない I 氏が権利を落札したのは、このような「賭け」の要素が鮭川にあったためである。⁽¹³⁾

4 権利の排他性が及ぶ領域と「かかわり」の重層性

落札された漁場の権利は翌年までの 1 年間である。鮭、鱒以外の魚種は権利の対象外で、網を持たずに鮎を捕ること、網やその他の漁法でウグイなどの雑魚をとることは自由だった。川魚の漁場は、水が緩んだところにウグイ、清水が湧くところに鮭、瀬のあるところに鮎といった具合に、魚種によってポイントが異なる。さらに、季節の変化とともに漁撈の対象も変化し、その変化によって季節の移り変わりが認知された。

4 月、こぶしの花が咲く頃には雪代水の流れに鱒が寄り、9 月になると鮎が瀬につき、10 月には鮭が清水を求めて溯上する。季節ごとの「楽しみ」を待つ間は、四季を通して捕れるウグイやニゴイ、フナの漁撈である。夏場は子供たちが本流から外れた「内川」と呼ばれる緩い流れで水遊びに興じ、あるいは競って阿賀野川を泳いで渡った。そうした遊びの延長で、子供たちもまた蚕を餌にして釣りをし、手ぬぐいで魚をすくった。冬になると水の深みに魚が寄るが、どの深みに魚が寄っているかは、経験がないとわからなかった。川魚は、自家消費か近所への配布、土産物などの用途に用いられたが、時に料理屋から直接に注文が入って小遣い銭になることもあった。

入札で獲得した権利は鮭、鱒という特定魚種の採捕だけでなく、川底の改変に対しても効力を持った。鮭、鱒の産卵期の習性を利用した漁を行ううえで、落札した漁場の川底が産卵場所に適しているか否かは重要な問題である。そのため、「川をいじる」「川をちよす」のは基本的に落札者に限られていた。

とはいえ、このような取り決めが完全に排他的であったわけではない。小松下流にある船頭集落の千唐仁では、舟で上流の玉石を採取して売ったという話が聞かれる。大きな玉石を動かすと、川底で網が引っかからないので鮭川にも都合が良い場合もある。このような場合には、「ここは触るな」という注文をつけることもあったが、他の集落の人々による玉石（「阿賀石」とも呼んだ）の採取は許容されていたのである。⁽¹⁴⁾ もちろん、玉石採取を生業に組み込んでいない小松の人々が、屋根の上に乗せる「屋根石」として玉石を採取することも可能であった。

5 漁業組合設立以後の変化

1950（昭和 25）年から 1951（昭和 26）年にかけて、阿賀野川流域には上流から東蒲原郡漁業協同組合、阿賀野川漁業協同組合、濁川漁業協同組合、新潟市大形地区漁業協同組合、松浜内水面漁業協同組合の 5 漁協が設立される。小松地先は阿賀野川漁業協同組合の管轄となり、集落に属していた「半瀬半川」の空間は漁業組合の管理下におかれ、鮭、鱒を含む特定の漁業資源へのアクセス

は漁業権者に限定された。このような制度の変遷は、入札の際の運上金の分配および集落収入の消失ということに結びつき、鮭、鱒漁への集落の人々の関心を減じることになったことは否めない。だが、生業複合形態および渡船やサンパ舟などを介した交通のなかで川との関係性は依然として保たれており、自給自足的生活のなかで雑魚漁が依然として重要な意味を持っていたため、集落の人々の阿賀野川との「かかわり」が大きく変化するまでには至らなかった。慣習的に集落の人々による漁撈はその後も続けられ、川魚は食卓に供されてきたのである。

④……………生業複合からみた河川空間と「かかわり」の重層性

1 生業複合による空間的結合

さて、これまでに述べてきたことから、小松の生業複合形態の特徴として、第一に集落内部での空間的結合、第二に流域としての空間的結合という2点を指摘できる。

第一に、生業はその時々⁽¹⁵⁾の社会的状況を反映させながら、世帯（家族）単位で複数のものを組み合わせ、田畑の耕作や漁撈は自給自足的な生活の基礎的な部分を占めていた。また、現金収入を得る手段は比較的短期間で変化しており、生涯にわたる固定的な「職業」から安定収入を得るのとは異なる生活戦略をとっていた。

世帯のなかで生業を複合させることは、天候不順による凶作や河川の氾濫による田畑の流出、蚕の病気発生や価格の下落の際に生じるリスク分散という意味を持っていた。これは菅豊が指摘する「在地リスク回避（Indigenous Risk Avoidance）」のリスク分散型と見ることができる。すなわち、「生業複合とは、狩猟、採集、農耕（飼育を含む）、漁撈など、資源の存在する空間、時期の違う活動を、同時、あるいは季節をずらして複数展開することによって、天災からの被害は軽減する方法である。簡単にいうならば、それが、旱魃という災害だった場合、農耕が受けたダメージは、いくぶんか採集によって補われ、また、洪水だった場合、漁撈によって補われることにより、生活自体が破綻する危険性は低くなるということである。危険そのものを回避（avoidance）するのではなく、被害を受けたときの代償、埋め合わせ（compensation）を確保する戦略である。これは、生産性は高いとはいえないが、内部経済の自立性、自給性のある程度高め、生活を『低いところ』で安定化することに寄与する」〔菅 2000：31〕。

確かに生業複合は、不安定で変動の激しい河川空間における生活安定化に寄与するものだった。だが、阿賀野川流域における貨幣経済の浸透という事象は、必ずしも生活を「低いところ」で安定させたわけではなかったようである。不安定な河川空間がもたらすリスクは、山仕事や川仕事による高収入が補って余りあるという意識もあった。

たとえば、前述した小松のG氏が粗朶担ぎで1日に200円を稼いだように、川仕事もまた高額⁽¹⁵⁾の収入をもたらした。1911（明治44）年生まれ⁽¹⁵⁾の南郷在住のKI氏は、子供時分に、阿賀野川の洪水で2度家を流され、3年間アンジャ小屋で暮らした経験がある。何度も水害の被害を受けながらも阿賀野川を離れなかったのは、祖父（孫親）が語り聞かせてきたように、「阿賀野川のそばにいたら食われないことはない」という理由からだった。ひとつ仕事では暮らしてゆけないが、いくつも

の仕事をおこなすことで暮らしが成り立つ。船頭や筏師をしながら、氏は一代で家屋敷と作業場を新築し、蔵を建てた。川仕事は舟を知らなくてはできない仕事で、危険な仕事であったが、そのぶん高収入だった。船頭はまだ米食が一般的でない時代から船で米を炊いて食べており、病人がいる家では「船飯」を求めに阿賀野川まで来たという〔安田町史編さん委員会 1997b: 31〕。

河川空間はリスクと同時に、儲けの大きな現金収入を得るチャンスを提供しており、そうした高収入が生活を「高いところ」で安定させるよう機能していたという側面もあったのである。

第二の特徴は、複数の生業が集落内で展開されることによって、山と川とを包摂した生業空間が形成されており、集落内部における空間的結合は、阿賀野川の上流と下流とをつなぐ空間とも交錯していたということにある。

阿賀野川は、複数の行為が同時に、または排他的でない形で存立可能な空間であった。交通の大動脈である阿賀野川の水面には、大型船が上流と下流の双方向に行き来し、筏が下り、サンパ舟がその合間を横切った。水中の川魚は、集落の成員であれば特定魚種以外は自由に採捕できたため、「半瀬半川」の時期の鮭川の落札者や新漁業法後の漁業権者が川へアクセスすることも、実態的にみても排他的な権利ではなかった。さらに、玉石採取にみられたように、小松では、川底の資源に対する他集落からのアクセスも容認されていた。⁽¹⁶⁾

井上真はコモンズを基本的にオープン・アクセスである「グローバル・コモンズ」と、権利が一定の集団に限定される「ローカル・コモンズ」とに分類し、さらに後者を利用に関する規制の有無で2つに区分する。「第一は、管理・利用について集団内である規律が定められ、利用に当たって種々の権利・義務関係が伴っている『タイトなローカル・コモンズ (Tight Local Commons)』であり、これまで狭義のコモンズとして認識されてきたものをさす。形態としては、法社会学で言うところの『総有』の概念〔熊本 1995: 90-92〕に基づいた資源利用・管理システムに近い。第二は、利用規制が存在せず集団のメンバーであれば比較的自由に利用できる『ルースなローカル・コモンズ (Loose Local Commons)』である。この場合、利用規制等は慣習法に組み込まれていない」〔井上 1997: 17〕。

この分類にならうと、小松地先の阿賀野川の漁業資源の利用・管理システムは新漁業法施行前の「半瀬半川」の時期には小松集落、以降は漁業権者という集団に限定されたローカル・コモンズと捉えられる。特に、鮭・鱒などの特定魚種へのアクセスはタイトなローカル・コモンズであるといえよう。だが、同時に、集落メンバーによるその他の魚種の採捕という点では、ルースなローカル・コモンズの側面もみられる。他集落からの玉石採取に対するある程度寛容な態度や、交通の大動脈としての阿賀野川という性格からは、オープン・アクセスという特徴が強調されることになる。ここに、川というコモンズの特徴として、排他的でない「かかわり」の重層性をみることができる。嘉田〔1997: 79-80〕は、地域(村落)の総有に基づく共有感覚が、同一空間に重層的資源利用という性格をもたらすと指摘している。このような観点からみると、阿賀野川にはひとつの地域(村落)だけでなく、流域社会の共有感覚による重層的資源利用があったといえるだろう。

2 河川空間の曖昧さと「かかわり」の重層性

阿賀野川が持つ「かかわり」の重層性は、河川空間が不安定で曖昧であるという点にも関わって

いる。満潮時と干潮時で境界が不安定で曖昧な砂浜や前浜が、公有という名目のもとにありながら地域の慣行によって(多くは自由に)その恵みが利用され、「農業と漁業の結節点」[コルバン 1992: 403]のような相貌を有していたように、しばしば流路を変える不安定で曖昧な阿賀野川も、国の管理下にありながら、地域の慣行や取り決めによって、山と集落、田畑、川を結ぶ多様な「かかわり」の型を生み出してきた。

阿賀野川という空間の曖昧さは、第一に、僅かに離れた集落の暮らしを異なるものにし、河川流域集落の生活文化に多様性をもたらした。たとえば、小松地先で他集落の人々による玉石採取が許容されるのは、小松では玉石採取という生業を複合させておらず、資源をめぐる競争が存在しないからであった。このような多様性は、河川流域として括ることができる生活文化の輪郭を曖昧なものにしてきた。換言すれば、流域集落の生活文化は、川の流れに沿って風景が変わるごとく、変化に富んだものとなっていたのである。

第二に、所有の曖昧化がある。阿賀野川の氾濫は上流から下流へと資源を運び出す。玉石や砂利、焚き物や木材の類である。これら資源へのアクセスの有無は、川沿い集落での生業複合の差異や、周辺の地形、共有林の有無などによって異なり、結果としてそれらが必要とする集落に多く分配されるシステムとなっていた。小松では春山での1カ月の柴刈りによって焚き物を調達するが、小松より下流の集落では川で焚き物や流木を拾う(前出の表2参照)。拾った焚き物などは、川岸に積み上げるだけで所有が確定する。大水の後には津川から筏用の木材が流れてくることもあったが、元の所有者が採しに来る前に、拾った者が家に運び込むとそれで所有が確定するという意識も強かった。河川の氾濫は、固定的な所有概念を混乱させ、無効化させる。それが川への「かかわり」や依存を高めることにも帰結していたのである。⁽¹⁷⁾

第三に、土地や空間の曖昧化である。「半瀬半川」であったはずの集落の境が、川向こうの「シマ」に及ぶのは、阿賀野川が流路を変化させた名残である。小松では「向島」がこれにあたる。集落の土地が川の流れに寸断され、流され、あるいは新たに形成されるため、出水のときには特に人々の目は阿賀野川に向かう。川欠けによる土地、家屋の流出も繰り返される。頻繁な流れの変化や川底の地形の変化は、川に対する安定的な知識を無効化する。川を見ることでその変化を知り、魚の生息場所にあたりをつける。水を読み、水の変化を操ることで舟や筏を漕ぐ。不安定な阿賀野川での生業は、毎日の川の観察、そして経験を通して体得された知識のうえに成立した技能、技法のうえに成り立っていた。⁽¹⁸⁾

⑤……………河川空間の過剰分化と「かかわり」の再構築

述べてきたように、阿賀野川の不安定で曖昧な性格は、集落内での複数の生業活動を通した「かかわり」を密なものにし、同時に流域社会として集落と集落を結びつける「かかわり」を生み出してきた。そのような「かかわり」を通して、阿賀野川にアクセスする際のルールや認識が排他的ではないものとして形成された。人々は日常生活のなかで「かかわりの自然空間」としての阿賀野川を生きてきたのである。それゆえ、流域の集落の人々にとって、阿賀野川は「人間化された自然」でもあり、「身体に埋め込まれた自然」でもあったのである。



写真4 阿賀野川頭首口

写真左奥が小松。

しかしながら、このような状況にも変化が生じてきた。小松における生業形態と生業空間を変化させる要因になったのは、都市的生活様式の浸透やモータリゼーションの進展、河川護岸工事の変化などであった。「燃料革命」によって春山での柴刈りは不要となり、護岸工事に用いた粗朶や木材需要の低迷で、山仕事は成立し得ない状況になる。山が生業空間から遠のき、同時に護岸工事などの川仕事もなくなった。

川の変化は著しかった。交通の大動脈としての阿賀野川がその地位を道路

へと譲り渡す契機は、1963（昭和38）年完成の揚川ダムが津川船道と下川筏の流路を分断したことにあるが、小松の人々にとっては、1966（昭和41）年の阿賀野川頭首口および馬下橋の完成が、より身近な「かかわり」の分断の契機として感じられている（写真4）。「大規模用水」とも呼ばれる頭首口は、馬下より下流の穀倉地帯を潤す農業用水として小松地先に建設されたもので、以後、石河原のある風景や、流れの速い川が作り出す瀬や淵はなくなり、⁽¹⁹⁾ 鮭川の賑わいも失われていった。渡船場も廃止された。

阿賀野川の水量を調節するダムや頭首工が、不安定であいまいだった河川の安定化をもたらし、治水という点に大きく寄与したことは疑いない。だが、不安定で曖昧であるという性格が、多様な「かかわり」の素地でもあったということは、安定化と引き換えに「かかわり」のあり方が変化する（「かかわり」を減じる）ということでもある。安定化は管理と制御によってもたらされ、阿賀野川の機能を治水や電源、水資源の供給源など限定的な機能に特化させた結果、空間の過剰分化和空間の意味の平板化〔関 1999：80-81〕が生じた。

生業が切り結んでいた山と川と暮らしの一体感は、阿賀野川が電源、水源という特定機能に特化することで徐々に薄まった。生業空間に組み込まれて、人の往来が途絶えなかった時期には、常に川へのまなざし（gaze）があったが、人の目が疎になった阿賀野川は集落の子供たちに適した遊び場ではなくなる。かつて川での遊びは、集落のなかで社会化してゆくうえで重要な事柄だった。川の流れや魚の生息場所を知り、舟を知ることは、集落で暮らしてゆくうえで不可欠の知識だったが、川が生業空間から離れるに従って、川での遊びはリスクを上回るメリットを持たなくなった。河川をダム建設などで遮断することは、単に物質循環を分断するだけでなく、人々の日常の行為と意識をも分断する契機になったのである。

「かかわり」の変化が進むなかで水質もまた変化した。かつての阿賀野川を知らない者にとっては十分に美しく思われる阿賀野川の変化を、鮭川の賑わいを知る SG 氏は「当時の子供たちが阿賀野川に写生に行くと水色の絵の具で川を塗ったが、現在の子供は緑色を塗るのではないかと、印象的に述べる。川岸からも深みの石の色や魚がホリつく様子を見ることができ、水に潜って目を開

けていられるほど澄み通っていた阿賀野川は、川石に苔が付き、水も濁っている。漁業権を持つ SG 氏も頻繁に川へ行くことはない。孫が来たとき、鮭、鱒、鮎、蟹の時期に限定されており、自給的な漁撈から趣味的な漁撈への変化がみてとれる⁽²⁰⁾。

小松における生業複合が生み出した「かかわりの自然空間」としての山と川の一体性、それを他集落と結び付ける阿賀野川という河川空間の「かかわり」の交錯が、物理的变化によって分断され、疎遠になってゆく過程が生まれた。しかしながら、このことは従来の「かかわり」のあり方や「かかわり」の主体が変質したということを意味するのであって、「かかわり」が失われたということの意味するのではない。

集落の生活文化や意識と行為の「川離れ」がみられる一方で、ダムなどで仕切られて安定した河川空間を舞台装置に町おこしのイベントが展開され、岸辺を眺めながら川の流れる経験できる観光船も運行されている。さらに、阿賀野川ではオープン・アクセス可能な公園機能を持つ空間を整備してゆこうという動きが見られる。新たな「かかわり」のあり方や主体を創造し、創出してゆく動きがみられる。このような新しい「かかわり」を模索する視点が、流域の人々の「かかわり」と交錯する状況も風景のなかに存在する。

津辺田川が阿賀野川と出会う地点に設けられた安田町の親水公園は、規模が小さな町であることに加えて、町の中心部から離れているため、普段は人影のない空間である。しかし、その空間に深みを感じられるのは、公園が親水性の高い、危険を排除した設計をとったということではなく、公園脇の河川敷が丁寧に耕された畑になっていることである。公園で川に親しむという単一の行為を誘導しながらも、その背景に河川敷耕作という行為が存在すること、複数の行為が折り重なっている状況から生まれる「かかわりの自然空間」のなかに、川は川としての存在感を持つ。

「川が汚れてきたのは、さまざまな理由があるが、結局、人の生活が川から離れたためである。川の景色をよくしようと考えるなら、もっと日常生活で川をつかいこむほうがよい。納涼、魚釣り、舟遊び、祭り……。こうした行為のうちに川を楽しめば、水辺の趣も深くなる」[中村 1982: 213]。

日常の「かかわり」によって、自然は「人間化された自然」となり、人々は「身体に埋め込まれた自然」を持ってきた。流域の人々が生業における「かかわり」を減じさせつつも、いまだ維持している「かかわり」の風景が、新たに河川との「かかわり」を求める仕掛けと重なることで、集落内外の人々の新たな「かかわり」の誘引になるのではないだろうか。その深化のなかで、訪れる人は阿賀野川という自然に愛着を持ち、阿賀野川という自然は人を惹きつけるものになるだろう。

註

(1)——このような視点は、かつて和辻哲郎が『風土——人間学的考察——』のなかで提示した自然環境認識に類似をみることができる。和辻は、「ある土地の気候、気象、地質、地味、地形、景観などの総称」を風土と呼び、「人間の自己了解の仕方」や「人間が己れを見いだす仕方」「主体的な人間存在が己れを客体化する契機」であると考へた[和辻 1979: 9, 17, 18, 23]。ここでの風土は、一方における〈自然＝客観〉と他方における〈人間＝主

観〉を接合する概念ではない。風土という概念のもとでは自然と人間の二元論だけでなく、人間と自然という立論を暗黙裡に前提とした自然と人間の相互作用という観点もまた否定される。

和辻は「風土の現象について最もしばしば行なわれている誤解は、我々が最初に提示したとき常識的な立場、すなわち自然環境と人間との間に影響を考える立場であるが、それはすでに具体的な風土の現象から人間存在あ

るいは歴史の契機を洗い去り、それを単なる自然環境として観照する立場に移しているのである。人間は単に風土に規定されるのみでない、逆に人間が風土に働きかけてそれを变化する、などと説かれるのは、皆この立場にほかならない」[和辻 1979: 17]と述べている。風土が「人間の自己了解の仕方」であるということは、人間の歴史や、個でありながら同時に共同態としての社会でもある人間を離れて、風土を論じることはできないということの意味している。風土は時間的でありながら空間的な概念として提示される。ある土地の気候や地形、植生などの自然の様態は、人間社会やそこにおける諸現象、たとえば慣習、文化、生活様式のなかにも見出せる。風土とは、人間と人間社会のなかではじめて存在することができるものなのである。すなわち、「肉体の主体性は人間存在の空間的・時間的構造を地盤として成り立つのである。従って主体的な肉体なるものは孤立せる肉体ではない。孤立しつつ合一し、合一において孤立するというごとき動的な構造を持つのが主体的肉体である。しかるにかかる動的な構造において種々の連帯性が開展せられる時、それは歴史的・風土的なものになる。風土もまた人間の肉体であったのである」[和辻 1979: 21-22]。

しかしながら、和辻の『風土』は、砂漠、牧場、モンスーンという風土の類型化と、それによる日本の風土性および日本の国民性の抽出という議論展開のなかで多くの批判を受けてきた。和辻に対する批判を井上 [1979] はイデオロギー的側面への批判、殊に生産という側面を欠いた自然の理解に対する批判、学問的手続きが不十分であるという批判の三点に要約している。なかでも批判が集中したのは、風土を類型化し、日本文化の特殊性を強調する姿勢がエスノセントリズムに傾斜しているというイデオロギー的側面に対してで、代表的なものに戸坂潤 [1967] がある。また、和辻の風土論をこのような批判から救い上げようとした議論に、高島善哉 [1966] や湯浅泰雄 [1995: 153-202] がある。

和辻に対する批判には、彼が環境決定論を否定しようとしたにもかかわらず、自らが環境決定論の誤謬に陥っているという批判も含まれる [湯浅 1995: 146-148]。風土をあたかも客観的実在のように捉える環境決定論のもとでは、ある自然環境や気象のもとに形成される社会や文化は非常に似通ったものになるという事実が示されるだろう。そして、環境決定論の誤謬をより明確に示するのは、自然環境の類似が社会や文化を似せるのではないという例であろう。たとえば、北海道では、アイヌ民族のつくりあげた風土と、後に同じ地で開拓者が生み

出した風土には根本的な差異がある。海外に移民した人々がその地に形成した風土も同じである。このような例を説明するには、風土を類似においてではなく、差異において捉えることが必要になろう。篠原 [1995: 69-70] が指摘するように、「風土とはもともと他との対比・相違を暗黙の前提として成立する言葉」であり、風土は同質的に見える文化のなかで差異を発見することこそ意味がある概念なのである。

(2)——人間と自然とをつなぐ関係性を示す「かかわり」という概念 [鬼頭 1996] に着想をえている。

(3)——篠原 [1998: 1-2] は、身体の延長として人と自己同一化する道具を用いる際の知識の総体を技能と呼び、自己から離脱・外化する道具（機械）をあやつる知識の総体を技術と呼んで両者を区別している。

(4)——マイナー・サブシステムとは松井健が提唱した概念で、生計維持という点で、経済的にはほとんど重要性を持たない生業活動であるが、対象となる動植物は季節限定的なものであるため、自然のなかに身をおき、単純な道具と高い技法をもって展開されるような生業活動のことである。「遊び」や「楽しみ」の要素が強くみられ、高い技法を持つ人は、たとえば「名人」のような社会的な威信を付与される [松井 1998, 2000, 2001]。

(5)——調査で訪れた阿賀野川流域で、とある地域の位置を尋ねたとき、ここから何本目の橋のたもと、という答えが返ってきた。その人はかつて川船の船頭をしていたのだが、道路の路線図を中心にして地図を描くことが当然だと思っていた私にとっては、認識地図の違いを実感する貴重な一言であった。

(6)——会津領であった歴史とアイデンティティとの関係を示す「物語」として、会津戦争のときに過去帳が一部消失してしまったという話がある。また、小松にある「権瓶」という姓はもともと「権平」と表記していたが、会津藩主の「松平」と同じ「平」を用いるのは不適であるという理由で改姓されたと伝えられている。

(7)——小松では、山水が使用可能であったため、阿賀野川の水を飲用に用いることは日常的ではなかった。だが、オオカワの水は飲用に適した上質の水であり、阿賀野川中流域でも、川を舞台に生業を展開している人々（船頭、筏師）、川に近く井戸水が悪い世帯（カナケがある＝鉄分が含まれるなど）、他に飲用に適した十分な水源を持たない地域（小松上流の釣浜、熊渡など）がオオカワの水を使用した。井戸の近くには排水を地下浸透させて濾過する「ヘナ」という大きな穴が掘られるため、オオカワの水のほうが井戸水よりも良いと考える人も

あった。実際に、井戸水が不衛生で伝染病が出たというケースもあった。オオカワの水を汲むことを「アガクミ（阿賀汲み）」とも呼んだ。最も良い水は、早朝に、上流部や瀬のある場所、清水の湧き出る場所で汲まれた水であるとされた。

(8)——村あげての養蚕熱で、自家労働力だけでは足りず、住み込みで人を頼む養蚕農家もあった。桑畑は戦時中の食糧増産のための開田事業により、順次、田圃に変化した。小松の養蚕は1965（昭和40）年頃まで続いていた。

(9)——田植えには「イイ」（結い）を用い、「イイを借りる」「イイを返す」という労働力の交換によって行われた。なお、開田事業以前からの田圃は「ウシロノ（後野）」と呼ばれた上野裏や上野あたりにあり、山水を引いていた。現在も一箇所、山水を引いた田圃が残っている。川に面した土地にも古い田圃があったという。

(10)——一般の木材の切り出しに携わる人が170円の日当だったと記憶されている。なお、その他の小松の山に関わる生業として、炭焼きをする人があった。

(11)——小松の鮭漁は「大きな賭け」であり、入札に参加する人々が「川師」と呼ばれたことから推測しうるように、豊漁のときの儲けが大きい代わりに、不漁のときには財産を減らしてしまう危険性もある、「おっかない商売」であった。入札の前に仲間内で夜遅くまで長々と相談をする姿には、緊張感が漂っていたという。入札に参加できるのは集落内の人に限られていたが、入札に必要な運上金を他の集落の人が出すこともあった。何らかの理由で落札した額を用意できない場合もあるが、このような場合を「ショウベンする」と言った。なお、入札の方法や落札金額の扱いなどについては、慣習により、阿賀野川流域の集落ごとに違いがあった。たとえば、小松の上流隣の石間では、入札金額の他、鮭1本あたりにかかるヤマ代が集落の収入になり、各戸に配分された[山口他1991:40-41]。安田町と水原町の境界に位置する稗ヶ川原場では、入札は行わず、皆が交代で網を引いた。なお、『安田町史』[安田町史編さん委員会1997b:123]に、小松での「鮭取りは、村中みんなで採って売った」という明治生まれの人の証言が残されていることから、入札が行われるようになったのは、比較的新しいのではないかと推測される。

(12)——早朝の漁に備えてアンジャ小屋に寝泊りする者は、漁場の監視役を兼ねており、寝る前に川を「見る」。当時の舟は棹をさして進み、棹が川底の石におつかるときに「カチーン、カチーン」と音が響く。漁場への侵入

者を示す棹の音がないことを確認するのである。

(13)——落札金額は1945（昭和20）年には約20万円、1950（昭和25）年頃は約100万円に高騰したという。なお、1945年は豊漁だったため、TG氏は正月用に小松集落全戸に鮭を「配給」した。鮭漁が「付き合い」に結びつくことを示す一例である。

(14)——田畑が少ない千唐仁では、川への依存度が高い「船頭集落」であった。ここでは、大型船にサンバ舟をつけて、遠くは鹿瀬町、津川町まで玉石を拾いに行ったという経験を聞くことができた。

(15)——阿賀野川流域では、1896（明治29）年から1898（明治31）年に、3年連続の大水害が発生している。既に現金経済が浸透していた下条村時代の小松では、1897（明治30）年に、「明治二十九・三十兩年ニ涉り、非常ノ凶作及水害虫害ニ罹り、農産物ノ不収穫ハ言フベカラズ、加之諸物價（ママ）ハ一般暴騰シ、其情ヲ酌量シ今般協議ノ上、明治三十年十月ヨリ向フ迄ケ年間、規約取締タル左ノ如シ」として、71名の連名で14項目からなる節約励行の「規約書」を取り交わしている。この内容を例示すると、「毎節句及ビ刈上ケ等ニハ餅搗一切ヲセザル事」、「神社佛（ママ）閣ノ祭事ニ際シ諸商人入込ムモ購求ヲ為サス及其野（ママ）店ト為ス地所及ビ建物等ハ決シテ貸与セザル事」、「飲食店ニ於テ所謂ナクシテ集合シ飲酒ハ一切スベカラザル事」、「旅芸人ハ宿舎ノ外宿泊セシムルヲ禁ズル事」のようにある[安田町史編さん委員会1997a:27]。ここから窺い知ることができる当時の小松の状況の一端は、「低いところ」での安定とは異なっている。

(16)——ただし、これは小松において玉石採取を生業に組み込んでおらず、資源をめぐる競争が存在しないことも関係している。たとえば、稗ヶ川原場では地先の砂利資源を集落で利用するために協同組合を設立して、他地域の人々のアクセスを制限した。

(17)——千唐仁では、上流から流れてくる木材を集めて小屋を建てたという話を聞くことができる。「今なら聞こえが悪いけれど、当時は、それが当たり前」の感覚であった。この感覚の延長で、船上で上流から戻るときに、川岸に「豚が落ちていた」といって拾ってきたら、後で警官がやってきたという笑い話もあった。

(18)——たとえば、海などでは「ヤマアテ」によって漁場の位置や船の航路を把握することができる。これはある程度、安定した知識として伝達することが可能である。しかし、頻繁に状況が変わる阿賀野川では、水の流れ、水面の波などで漁場や航路の安全を知る。稗ヶ川原場の

H氏によると、「教えるのは簡単だけど教えて覚えられないものではない」のが川である。H氏は重ねて次のように述べた。

「櫓を一枚、流れにあてる当て方、感覚ってうかね。櫓をちょっと動かすと、抵抗が緩くなる。水を〈切る〉と〈流れる〉と〈抑える〉ことで舟を動かす。向こう岸からこちら側へくる第1本をカーッと力を入れないと舟は動かない。ひと棹めの力の入れ方で、舟の動かし方が違ってくる。それを見て覚えるわけさ。それを体得する。いっちょ間違えると、舟は駄目だ。本当に生まれ落ちたときから川の流れを見てきた人間と、婿に入って、ただ川がある、舟がある、っていう人とは違う。川ってというのは、平凡に流れているようだけど、上水と下水とで流れが違うんです。それを見極めないと。正面のさざ波を見て、どっちに流れているか、その川が浅いか深いか。物の流れに逆らうなっていう言葉があるでしょ。流れに

逆らったら絶対に駄目。水の流れにのれ。それが大切なんですよ。それが基本なんですよ」。

(19)——阿賀野川頭首口の建設と鮭・鱒漁の影響については、星野 [1991:13] や山口他 [1991:52-54] を参照のこと。

(20)——1965 (昭和40) 年の新潟水俣病発生後、子供が川で泳ぐことが禁止され、1972 (昭和47) 年に安田町で水俣病患者が発生してからは、高い水銀値が検出されたニゴイやウグイなど四季を通して食されていた魚種は、川魚の喫食の「安全宣言」が出されて以降もほとんど食されなくなっている。嘉田 [2002:89-113] は、昭和30年代と現在の食生活とを比較して、「近い食」が「遠い食」へと変化したと論じている。小松で「近い食」だった川魚は、新潟水俣病患者が身近に発生したというモメントによって、「近い食」ではなくなったといえることができる。

参考文献

- コルバン (Corbin, A.) 1992 (=1988) 『浜辺の誕生—海と人間の系譜学—』 福井和美訳 藤原書店
グルン (Gurung, C.P.) 1996 「持続可能な環境保護計画のために—アンナプルナ保全地区プロジェクトの実践—」 『世界』629:154-155
星野和枝 1991 「阿賀漁連の成立と変遷」 阿賀に生きる製作委員会編『AGA草紙③阿賀野川の川魚』4-15
井上 真 1997 「コモンスとしての熱帯林—カリマンタンでの実証調査をもとにして—」 『環境社会学研究』3:15-32
井上光貞 1979 「解説」 和辻哲郎『風土—人間学考察—』 岩波書店
嘉田由紀子 1997 「生活実践からつむぎ出される重層的な所有観—余呉湖周辺の共有資源の利用と所有—」 『環境社会学研究』3:72-85
2002 『環境社会学』 岩波書店
鬼頭秀一 1996 『自然保護を問う—環境倫理とネットワーク—』 筑摩書房
熊本一規 1995 『持続的開発と生命系』 学陽書房
松井 健 1998 「マイナー・サブシステムの世界—民俗世界における労働・自然・身体—」 篠原徹編『民俗の技術』 朝倉書店
2000 「マイナー・サブシステム論」 未来開拓大塚プロジェクト事務局編『アジア・太平洋の環境・開発・文化』1:23-28
2001 「マイナー・サブシステムと琉球の特殊動物—ジュゴンとウミガメ—」 『国立歴史民俗博物館研究報告』87:75-90
松本史郎・本間義治 1995 「魚類および漁業」 本間義治編『阿賀野川の陸水生物学的研究—新潟水俣病の原因究明との関連において—』 新潟日報事業社
Moscovici, S., 1974 *Hommes Domestiques et Hommes Sauvages*, Union Générale d' Editions, Paris (=1974『飼いやられた人間と野性的人間』 古田幸男訳 法政大学出版局)
中村良夫 2000 (=1982) 『風景学入門』 中央公論新社
大熊 孝 1988 『洪水と治水の河川史—水害の制圧から受容へ—』 平凡社
リバーフロント整備センター編 2001 『川・人・街—川を活かしたまちづくり—』 山海堂
沢田允茂 1975 『認識の風景』 岩波書店
1997 『哲学の風景』 講談社
関 礼子 1999 「自然保護の行為と価値—織田が浜埋立反対運動を支えた『故郷』という関係—」 社会運動論研究会編『社会運動研究の新動向』 成文堂
Simonnet, D., 1979=1991 *L'écologisme*, Press Universitaires de France (=1980『エコロジー—人間の回復をめざ

-
- して一』辻由美訳 白水社 ただし訳書は1979年版に基づく)
- 篠原 徹 1995 『海と山の民俗自然誌』 吉川弘文館
- 1998 「民俗の技術とは何か」篠原徹編『民俗の技術』 朝倉書店
- 菅 豊 2000 「在地リスク回避論」未来開拓大塚プロジェクト事務局編『アジア・太平洋の環境・開発・文化』
1:29-35
- 高島善哉 1966 『現代日本の考察』 竹内書店
- 田口洋美 1992 『越後三面山人記—マタギの自然観に習う—』 農山漁村文化協会
- 戸坂 潤 1967(=1937) 『和辻博士・風土・日本』『戸坂潤全集』第5巻 勁草書房
- 内山 節 1994 『森にかよう道—知床から屋久島まで—』 新潮社
- ユクスキュル (Uexküll J. von)・クリサート (Kriszat G.) 1973 (=1970) 『生物から見た世界』日高敏隆・野田
保之訳 思索社
- 和辻哲郎 1979 (=1935) 『風土—人間学的考察—』 岩波書店
- 山口喜代治 (話し手)・佐藤真 (聞き手)・星野和枝 (まとめ) 1991 「聞き書き『漁協私史』」阿賀に生きる製作委
員会編『AGA草紙③阿賀野川の川魚』40-55
- 安田町史編さん委員会 1997 a 『安田町史 近代編一・教育編』 安田町
- 1997 b 『安田町史 民俗編』 安田町
- 安室 知 2000 「農山漁村の民俗と生物多様性」宇田川武俊編『農山漁村と生物多様性』 家の光協会
- 湯浅泰雄 1995 『和辻哲郎』 筑摩書房

〔謝辞〕

本稿は、安田町小松をはじめとする阿賀野川流域の方々の調査協力、資料提供に多くを負っている。阿賀の館、安田町教育委員会、吉田東伍記念博物館にもたいへんお世話になった。心より感謝申し上げる次第である。なお、本稿では、平成12年度河川環境財団河川整備基金助成事業による助成（助成番号12-1-④-1号）を受けて実施した調査データ、資料を主として使用している。

(帯広畜産大学、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2002年7月4日受理、2002年10月4日審査終了)

資料 前ノセ川大福帳

初漁鉤掛ノ部				
日 付	重 さ	状 態	金 額	備 考
11月7日	1貫100匁 1貫200匁 1貫300匁 700匁 750匁 1貫400匁	モ ケ モ ケ	7円20銭 # # 1円40銭	汽車賃2人分(1円08銭)差引後残額 村松へ売上入る TG氏分 I氏分
11月8日	950匁 950匁 650匁 730匁 850匁 900匁 500匁		8円 # # # # 2円 1円	佐取へ売上入る
11月11日	1貫500匁 1貫500匁		8円 #	
11月12日	850匁 800匁 500匁	モ ケ	1円70銭 2円24銭 1円40銭	
11月14日	1貫50匁 760匁 750匁		3円 2円10銭 2円10銭	
11月15日	850匁		2円12銭	TG氏分
11月17日	570匁		1円20銭	
11月18日	790匁		1円60銭	50円で網を購入
11月19日	1貫50匁 1貫450匁 500匁		2円90銭 4円 1円35銭	
計	メ27本		53円19銭	大入叶(内引1円08銭)
網ノ部				
11月19日	550匁 560匁 680匁 750匁 420匁		1円76銭 1円57銭 2円10銭 2円47銭	網おろし, 大入叶
11月21日	2貫200匁 1貫200匁 940匁 700匁 550匁 1貫100匁	シボリ	7円26銭 3円84銭 3円 2円10銭	TG氏の使いもの I氏
11月22日	600匁		1円80銭	
11月24日	2貫400匁 1貫500匁 2貫230匁 1貫350匁 1貫830匁 1貫900匁		7円92銭 4円95銭 7円36銭 4円45銭 6円04銭 5円90銭	

	1貫450匁 1貫100匁 1貫匁 1貫300匁 1貫400匁 1貫200匁 1貫250匁	モ ケ	4 円50銭 2 円75銭 2 円30銭 14円90銭 # # #	
11月25日	1貫300匁 660匁 720匁 1貫170匁 550匁 1貫700匁 350匁 600匁	シボリ	1 円84銭 3 円62銭 1 円48銭 5 円61銭 75銭 1 円50銭	TG氏, 祝切 TG氏
11月26日	1貫920匁 1貫590匁 1貫670匁 1貫匁 1貫970匁 500匁 350匁 940匁 600匁 1貫490匁 1貫550匁 1貫550匁 1貫270匁 740匁 1貫100匁 1貫100匁 450匁 850匁 1貫450匁 1貫300匁 860匁 1貫250匁 880匁 550匁 550匁 450匁 1貫300匁 1貫300匁	シボリ	6 円33銭 5 円18銭 2 円80銭 1 円30銭 2 円66銭 1 円62銭 4 円47銭 5 円11銭 5 円11銭 3 円81銭 8 円92銭 # # # 9 円50銭 # # 3 円60銭 2 円64銭 1 円54銭 1 円50銭 1 円20銭 3 円 3 円	大漁 I 氏, 祝切 TG氏, ツケヨ(塩漬用) TG氏 TG氏, 石間へ進呈
11月27日	2貫100匁 1貫700匁 1貫600匁 920匁 710匁 540匁 1貫400匁		6 円93銭 5 円44銭 5 円12銭 2 円57銭 3 円 #	
11月28日	1貫900匁 710匁 950匁 1貫230匁 550匁 500匁		5 円44銭 1 円77銭 2 円37銭 3 円69銭 1 円37銭 1 円20銭	

	1 貫 50匁 1 貫110匁 1 貫550匁 1 貫450匁 1 貫400匁 1 貫100匁 730匁 750匁 860匁 1 貫520匁 380匁 1 貫800匁 1 貫700匁 1 貫 50匁		35円30銭 # # # # # # # # 2 円94銭	TG氏使用、五泉にて I 氏、ツケヨ I 氏、ツケヨ
11月29日	1 貫630匁 1 貫600匁 1 貫匁 1 貫100匁 500匁 1 貫470匁 950匁 900匁 1 貫 80匁 1 貫550匁 1 貫 50匁 980匁 1 貫560匁 1 貫420匁 650匁 840匁 400匁 1 貫230匁 1 貫200匁 650匁 650匁 1 貫230匁		10円 # 3 円30銭 44円70銭 # # # # # # # # # # # # # # #	TG氏、切る I 氏、切る
11月30日	1 貫 50匁 250匁 1 貫520匁 950匁 750匁 1 貫匁 1 貫430匁 1 貫550匁 650匁 620匁 880匁 1 貫160匁 1 貫匁 1 貫290匁 1 貫550匁 600匁 790匁 450匁 1 貫 50匁 1 貫620匁 1 貫900匁	モ ケ	2 円80銭 # 4 円50銭 2 円47銭 2 円 35円 # # # # # # # # # # # # #	二人で使いもの TG氏、一條院様へ TG氏 I 氏、三本木へ

[illegible]

	1貫150匁	モ ケ	2円64銭	I氏, ツケヨ
	1貫 50匁	モ ケ		TG氏, ツケヨ
	1貫 50匁	モ ケ		
12月7日	720匁		1円70銭	
	1貫匁		2円70銭	
	500匁		1円30銭	
	870匁	シボリ	2円70銭	
	1貫100匁	モ ケ	2円53銭	
	780匁			TG氏
	200匁			TG氏
	1貫100匁	モ ケ		I氏, 三本木へ
	500匁		6円35銭	
	500匁		#	
	500匁		#	
	550匁		#	
	800匁	シボリ	2円48銭	
	1貫200匁		2円50銭	
	550匁	モケキズ		猫に食われる
	1貫700匁		5円61銭	
	980匁		3円03銭	
	1貫800匁		5円94銭	
	1貫200匁		2円87銭	
	1貫200匁	シボリ	3円72銭	
	870匁	シボリ	2円70銭	
	690匁		24円70銭	
	540匁		#	
	570匁		#	
	1貫100匁		#	
	670匁		#	
	1貫200匁		#	
	550匁		#	
	400匁		#	
	450匁		#	
	1貫匁		#	
	1貫150匁	モ ケ	2円64銭	
	1貫200匁	モ ケ		I氏自食
	950匁	モ ケ	2円18銭	
	2貫350匁		15円20銭	
	1貫780匁		#	
	480匁		#	
	720匁	モ ケ		I氏長徳寺へ使いもの
	1貫500匁			I氏, ツケヨ
	1貫500匁			TG氏, 使用
	1貫100匁		3円63銭	
	550匁			TG氏自食
	550匁			TG氏使用
	1貫100匁			TG氏使用
	1貫600匁		4円80銭	
	1貫300匁			TG氏, 祝切
	1貫500匁	モ ケ	3円75銭	
	2貫 50匁			TG氏, ツケヨ
	1貫900匁			I氏, ツケヨ
	1貫900匁		6円27銭	
	1貫匁		3円	
	1貫500匁		8円20銭	
	1貫200匁		#	
	1貫320匁		4円22銭	

	860匁 480匁 400匁 550匁 1貫400匁 1貫170匁 880匁 800匁 1貫150匁 950匁 850匁 880匁		2 円32銭 8 円49銭 # # # 3 円62銭 2 円85銭 1 円95銭 2 円	TG氏, 使いもの TG氏, 使いもの TG氏, 使いもの
12月10日	420匁 1貫840匁 930匁 1貫180匁 670匁 1貫500匁位 1貫200匁位 1貫130匁 380匁 1貫匁 1貫900匁 2貫400匁 1貫600匁 780匁 650匁 320匁 800匁 420匁 500匁 620匁		1 円 6 円07銭 2 円97銭 3 円77銭 3 円61銭 3 円 17円63銭 # # # # # # #	お寺へ使いもの TG氏, トモカケ祝儀 TG氏の親族網引ノ祝儀 採卵手来た時に I 氏自食 TG氏ツケヨ TG氏ツケヨ
12 月 12 日	2 貫匁 570匁 1貫780匁 1貫400匁 1貫300匁 1貫匁 920匁 600匁 350匁 1貫匁 1貫800匁 1貫400匁 1貫400匁	モ ケ	6 円60銭 5 円44銭 3 円92銭 3 円50銭 3 円10銭 2 円85銭 1 円80銭 70銭 2 円 5 円94銭 3 円92銭 4 円62銭	80 匁マケ
12月13日	1貫960匁		6 円46銭	
12月14日	1貫100匁 1貫520匁 1貫700匁 1貫300匁 1貫匁 500匁 720匁 450匁		3 円63銭 4 円29銭 3 円20銭 1 円35銭	大神祭 大神祭 I 氏, 自食 I 氏, 使もの
計	ノ 297本		865円53銭	(TG氏, I 氏魚代含める)

取上ノ部				
12月16日	1貫300匁 1貫600匁 2貫140匁 1貫50匁 1貫630匁 1貫680匁 1貫750匁 580匁 570匁 1貫500匁 510匁 1貫匁 450匁 980匁 900匁 700匁	大モケ 大モケ 大モケ	4円16銭 3円20銭 5円37銭 3円46銭 5円54銭 5円77銭 1円70銭 4円95銭 2円70銭 2円94銭	I氏, ツケヨ I氏, 使いもの I氏, 使いもの 帳外採卵手に, I氏自食分 ヨノコメナ, TG氏 I氏
12月17日	1貫30匁 600匁 430匁 420匁		1円65銭 1円	村念仏講中 村念仏講中
12月18日	1貫950匁 1貫700匁 1貫600匁 300匁		6円44銭 5円60銭	I氏分, ツケヨ TG氏, ツケヨ 帳外採卵手に, I氏自食分
12月20日	1貫800匁 2貫50匁 1貫400匁 1貫550匁 1貫匁 700匁	大モケ	12円70銭 # 4円80銭	TG氏 TG氏 I氏, 三本木へ祝儀 I氏分 帳外, TG氏自食分
12月21日	650匁 550匁 490匁 700匁	モケ	1円95銭 3円10銭 #	I氏, 自食分
12月22日	1貫100匁 830匁 1貫800匁 2貫200匁 650匁 1貫30匁 750匁 2貫200匁 330匁	モケ 大モケ モケ モケ	2円50銭 2円57銭 5円94銭 7円26銭 82銭	TG氏分 TG氏分 TG氏, 自食 TG氏
12月29日	900匁 900匁 1貫匁 1貫100匁 1貫230匁	モケ		TG氏 I氏
計	メ48本		177円97銭	(表中金額未記入部分含む)

出典 石井欣治氏蔵より作成。

Subsistence and “Nature Space of the Relations”: The Uncertain, Unstable Space of the River

SEKI Reiko

In this paper, I will refer to the various intersections of the people and nature as “Nature Space of the relations” and I will consider the “relations”, and the changes in such relations, between the actions of multiples subsistence by the people and the river, in the reaches of the Agano River, in Niigata Prefecture.

The Agano River frequently overflowed and changed course. When the river broke its banks, it washed away the existing soil and created new soil. However, the people of the basin villages took multiple subsistence as a life strategy, which brought great advantages to their life from the uncertain and unstable river.

Here I will focus on the ways of multiple subsistence and discuss the characteristics of “Indigenous Risk Avoidance” and multiple “relations” which caused various subsistences to be developed. These “relations” were concerned with the unstable space of the Agano River; they gave rise to various local culture of everyday life, made the idea of ownership unclearly, and made stable knowledge useless because of changes in the river space.

Thus I will show that the change of the subsistence and the local culture of everyday life altered the people’s “relations” with the river.